

西征雜詠（其二）：文苑

著者	笠間, 梧園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	31
ページ	57-58
発行年	1894-11-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/4474

めをまよかへて郡をば、松浦と呼へれ文祿の、名古屋もさのみ遠からず、いつれも今の世の中に、よしある處ありければ、とふらふ袖も露繁し、

二十一 段

沖つ白浪うちよする、虹の松原たのづから、うよめく風の琴の音を、まどぬきく日はから錦、たうやく惜しきものこころ、小城の櫻が岡の花、をりあらぬこそ恨まれ、ある聖をも伴ひて、見せまましうば見所の、あきものうはとといひままし、

二十二 段

天山に立つ碑は、麗せき阿蘇の大丈夫が、たらの濱に敵をうち、來りてこゝにみよしの、とかどのみため潔き、名をとめたる處あり、もしさかしまの世にあは、かくてぞ操立てつべき、かくてぞ國を興すべき、かくてぞみかどは護るべき、

西征雜詠 (其二)

教授 笠間 梧園

宿松嶋枕上作

繞枕波濤吠晚風。喧囂恰與在船同。此身不是竄流客。一夜眠安孤嶋中。

旅寓獨酌醉中放歌

日暮海風吹髮生。豪氣勃勃欲鞭鯨。天涯官跡茫如夢。悔携筆硯入帝京。丈夫成名豈無

地。報國未必在簪纓。雪後孤竹色愈綠。雲裡

月光不傷明。却愧圭角未得磨。職詩輒作不

平鳴。此夜肅々寒雨下。爐邊呼得酒一瓶。哀

絲豪竹彼一時。吟哦沈々獨自傾。醉裡乾坤

堪容軀。世途艱險未足驚。即今應學幽谷鳥。

深藏羽翼未放聲。自期他日遷喬處。和氣霽

然春滿城。

三到松嶋

偶作

寒濤拍岸響黃昏。春色尙遲海上村。他日因緣孤嶋雪。已留鴻爪第三痕。

毫釐遂生千里差。何人敢不憶邦家。寄言南客須回首。前轍年來覆幾車。

三月某日訪本川氏于橫尾山中

途上作

紀念會をことほきてよめる

砲聲動地薩肥間。羽檄東西事太殷。却有吾

本田弘

曹無一事。探花訪友度春山。

諸ともに心をたかく龍田山

宿本川氏此夜有雨

ふみのほりつゝ祝ふ今日かき

曾出田園事遠征。軟紅塵裡寄吾生。十年復

年毎にいや榮えゆく小松原

結烟霞夢。一枕松風夜雨聲。

國の柱の生もゝてなむ

旅夜述懷

未賦一篇歸去來。十年萍跡尙天涯。數莖白

客舍夜雨

中内義一

髮入將老。何處青山骨可埋。身後休論名勒

夜はまづか

石。眼前須盡酒如淮。幾多感慨向誰吐。付與

芭蕉をやぶる 雨の音

寒燈照我懷。

歸ると見つる 故郷の

題大石良雄妓樓夜宴圖

夢を破りて

綠酒紅燈夜漏遲。放歌酣醉擁冰肌。英雄最

いとすこし。』

是苦心處。不在江城雪月時。

すき間もる